



体育教師の成長と学びに関する研究：信念と経験の相互影響関係に着目して

著者	朝倉 雅史
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2015
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102乙第2745号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00129989

体育教師の成長と学びに関する研究
—信念と経験の相互影響関係に着目して—
朝 倉 雅 史

本研究は学校体育活動を中心に担う体育教師の成長と学びを支えるため、信念と経験にみられる相互影響関係の検討を通じて、体育教師の信念の構造と機能を明らかにし、体育教師が自らの信念を問い続けていくために有効な学習や研修の在り方を検討することを目的とするものである。本論文の構成は、「体育教師の信念は問われ難いのか？それはなぜか？」「体育教師の信念はどのように問い直されるのか？」「体育教師の信念の問い直しの問い直しにはどのような学習環境が有効か」という3つの問いを設定し（序章）、先行研究の整理と検討（第1章）、研究方法の検討（第2章）の後、以下の5つの課題に沿って実証的研究を展開した。すなわち、1) 体育教師の学習経験と学習環境の実態把握（第3章）、2) 実践における信念の表出と形成過程の解明（第4章）、3) 信念の内実と変容の様相の解明（第5章）、4) 経験の受け入れと信念変容に影響を及ぼす信念の解明（第6章）、5) 信念に影響を及ぼす経験と教訓の抽出と検討（第7章）である。そして、これらの知見を踏まえた統合的な考察によって、体育教師の信念の問い直しにとって有効な学習環境を明らかにし（第8章）、結論として本論文の要約および今後の研究課題を示した（終章）。本研究の主要な結果は以下の通りである。

序章では、体育教師の成長を実践的な知識の形成や発達に求めたとき、それらを根底で規定している信念が重要な役割を果たすが、学校教育活動は優れて社会的な営みであることから、個人的な信念と社会的な要請とのやり繰りをしていく中で、信念を問い直し必要に応じて柔軟に変容していくことを体育教師の成長としてとらえた。そして、そのような体育教師の成長を支える学びと学習環境の在り方をあきらかにするために3つの問いを設定し、それら3つのフェーズに沿って実証研究を展開していく枠組みを示した。

第1章では、関連分野の先行研究を整理検討し、本研究における具体的課題を導出した。第1節では体育経営学における体育教師に関する研究を検討し、学校体育経営研究における人的資源マネジメント論を展開する必要性とそれが学校体育経営のイノベーションと環境適応にとって重要な課題であることを示した。第2節では、教師の認識・思考・行為に関する研究を検討し、教師の意思決定研究と知識研究の展開を整理することで、信念研究の意義を明確化した。第3節では、教師の信念に関する実証的研究を検討し、主に信念と行動の関係は直線的に結び付けられないこと、教師は複数の対象について信念を有しているため、信念を構造化された体系として捉える必要があること、信念の中には教師の資的向上を促進するようなものと阻害するものが存在することを示した。第4節では、教師の成長・発達過程に関する研究を整理し、教師の専門性向上の過程を信念が変容していくプロセスとして捉える必要性、および信念の形成や変容に影響を与える要因は入職前後を通じて検討する必要性を示した。そして、第5節において教師の学習を支えるシステムに関する研究を検討し、主に教師の省察と研修に関する先行研究の検討から、省察および既存の研修体制の問題を指摘し、信念の形成や変容を支えるためには、自身の信念を問い

直す深いレベル（高次）の省察をもたらすような学習環境（研究体制）の構築が課題となることを示した。

第2章では、これまで不十分であった教師の信念概念を心理学の知見を援用することで詳細に規定し、その内部構造を明らかにしたうえで、分析の対象とする信念を明確化し、信念と経験の相互影響関係をあきらかにする分析枠組みを構築した。さらに、本研究の意義として、信念の内部構造および信念と経験の相互影響関係の検討、体育教師の成長と学びをもたらす経験の分析視角の設定、体育教師の成長と学びに関する本研究の社会的・実践的意義、大学における現職研修についての実践的示唆を提示することを示した。そして、主に「授業観」「研修観」「仕事観」の3つの信念と「研修経験」「入職前経験」「入職後経験」「教師の成長経験」「一回り成長した経験」の5つの経験に着目し、二つのフェーズからなる5つの実証研究を展開した。

まず第3章および第4章で構成されるフェーズⅠでは「体育教師の信念は問われ難いのか？それはなぜか？」という問いのもと、体育教師の信念の問い直しと変容に関わる実態把握から、問題状況を明確化するために2つの実証研究を展開した。

第3章では、体育教師の学習環境及び学習経験の実態を把握するため、定量的調査に基づく分析と考察を行い、授業観の変容の実態と学習経験および研修機会への参加状況と研修観について検討した。その結果、体育教師の授業観の変容はおよそ半数の教師にしか起こっておらず、また、経験年数を積むことによって変容するものでもなかった。学習経験および研修機会への参加状況については全体的に停滞しており、体育教師の学習は個人的な情報収集と同僚体育教師との情報交換などに制限されていた。さらに研修観の実態を検討した結果、多くの体育教師が短期的・実践的（即効的）・受動的・閉鎖的な研修観を有していることが明らかになった。

第4章では、体育教師の実践を規定する強い信念の形成過程と実践における表出をエスノグラフィックな事例研究によって描き出し、予期的社会化過程および実践現場における信念の形成と維持に関わる経験を検討した。その結果、体育教師は幼少期のスポーツ環境における経験から現在の職場における経験によって強い信念を形成してきたことが明らかにされた。また、学校現場においては切迫した問題認識から形成された信念が共有されることにより、個々の教師の価値観に関わる信念の省察が妨げられる「信念共有のジレンマ」が生起していることを明らかにした。

次に第5章～第7章で構成されるフェーズⅡでは「体育教師の信念はどのように問い直されるのか？」を問いとして設定し、体育教師の信念変容の難しい状況の中で、信念が変容するとしたらどのような信念と経験の影響関係によって生じるのかを検討するため、3つの実証研究を展開した。

第5章では、体育教師の授業に対する信念である授業観の内実とその変容の様相について検討するために、質問紙調査の内容分析（テキストマイニング）による授業イメージの抽出と比較分析を行った。その結果、体育教師の授業観は入職前の経験に強い影響を受けている「態度・規律志向」「運動量・安全志向」から入職後の経験に影響を受けた「学習組織化志向」へ変容することが明らかとなり、同時に授業観の変容が入職前の経験と入職後の経験の相反的な影響関係の中で生じることが示唆された。

第6章では、授業観の変容が入職後の経験に影響を受けることを踏まえて、入職後の経験がど

のような信念によって授業像の変容に結び付くかを検討するために、経験から学ぶ力としての仕事観および教師イメージの構造と成長経験の受け入れに対する機能を定量的に検討した。その結果、体育教師としての誇りともいえるべき開放的な仕事の信念が、成長経験の積極的な受け入れを促進することが明らかになった。一方で、体育教師が有する専門的閉鎖を中心とした閉鎖的な信念と教職経験年数の積み重ねが、成長経験の受け入れを阻害することが明らかになった。

第7章では、体育教師による信念の問い直しや変容には、職務を通じたどのような場におけるいかなる学びが関わっているかを検討するために、体育教師が一回り成長した経験と教訓の抽出と長期研修に参加した体育教師の詳細な事例研究を行った。その結果、信念変容に大きく関わる認識変容の教訓が、他者と密に接する経験や自らの実践と信念を晒すような経験、異質な情報に触れる経験の重要性が示唆された。さらに、事例的検討を通じて体育教師の信念変容は漸次的かつ信念体系全体の変動として生じること、また、その信念変容をもたらす経験は、学び方の学習経験を中心として理論的知識や客観的データに触れる経験とそれらを支える越境経験によって支えられていることが明らかとなった。

以上踏まえて、体育教師の信念の問い直しに有効な学習環境を明らかにするフェーズⅢでは、実証研究の成果を統合的に考察し、体育教師の信念の問い直しにとって有効な学習環境を考察した。その結果、体育教師の信念の問い直しには実践現場では生起し難い、「越境経験」を契機とした「自己決定型学習」による学びが重要であることを考察した。そして、その学びをもたらす学習環境として、大学における長期研修の有効性と限界を考察すると共に、日常的な場に信念の問い直しを促すような具体的方策として「教科横断型研修」「異校種縦断型研修」「大学との連携による研修」を示した。

終章では、結論として本論文の要約を示すと共に今後の研究課題を示し、第一に予め限定した体育教師の信念を「信念体系」として明らかにすること、第二に、個別事例を対象とした詳細な研究を展開していく必要性を示した。そして第三に、体育教師の信念の問い直しや変容に関する介入的研究の必要性を提起した。最後に、越境経験と自己決定型学習を経験した体育教師がいかにして学校現場に戻り、実践を展開していくのか、換言すれば元の場所に戻った時、そこではどのようなことを経験し、どのような学習成果の実現をなすのか／しないのかを丹念に検討していくこと課題として示した。